実践報告２

生徒一人ひとりの自分探しを助ける総合的な学習「鹿本高校Qタイム」

熊本県立鹿本高等学校　徳永寛毅



学校紹介

熊本県立鹿本高等学校の歴史は古く、２つの流れを持つ。旧制鹿本中学（明治29年創立）と旧制山鹿高等女学校（明治45年創立）である。戦後、鹿本中学と山鹿高女は、旧鹿本高校と山鹿高校としてそれぞれ再出発する。昭和43年、旧鹿本高校と山鹿高校が統一され、現在の鹿本高校が発足した。平成19年には、統合40周年の節目に創立110周年記念式典が行われた。110年を越える歴史を誇る県下有数の伝統校であり、文武両道の精神を脈々と受け継ぎながら、新たな「希望」に挑戦するフロンティア精神の溢れる進学校である。現在全日制普通科のみで、各学年7クラス、生徒数は856人（平成21年4月現在）である。（普通科の中には平成7年に設置された「体育コース」が学年1クラスある。）

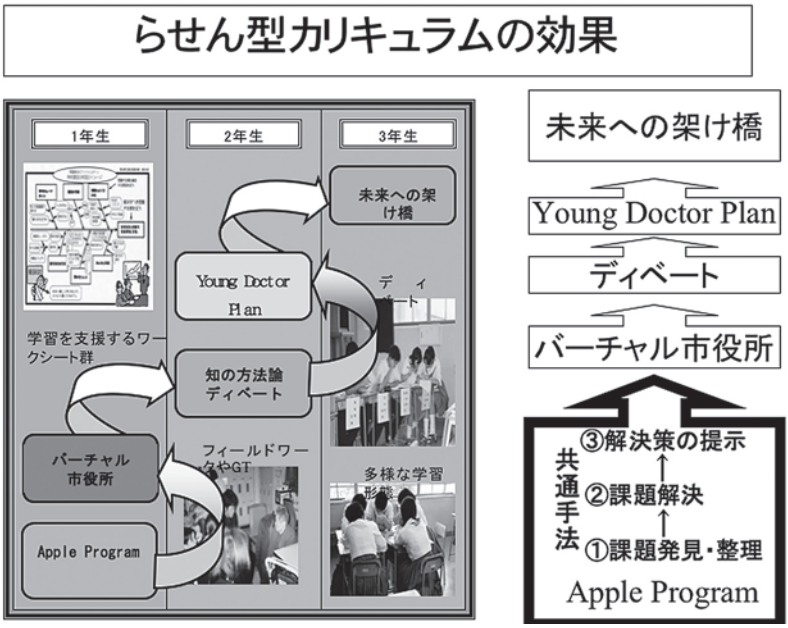
３綱領「自主自律」「質実剛健」「師弟同行」の精神を柱に、生徒一人ひとりが「主役」の目標達成、希望の実現を目指し、人格教育を基盤とした「日本一の学校」つくりが行われている。

平成11年から３年間、文部科学省の研究開発学校の指定を受け、「総合的な学習の時間」に係る研究を行った。当時のカリキュラムを改良しながら10年にわたり継続中で、現在も学校訪問が後を絶たない。平成21年2月に文部科学省で行われた「総合的な学習の時間フェスタ2009 ～ だから“総合”は やめられない！ ～」において事例発表を行うなど、日本一の総合的な学習の時間を実践している学校である。

実践発表の経緯

「起業教育」という言葉さえほとんど知らなかった私が村川先生（鳴門教育大学）の紹介があったとはいえ、今回発表するに至った動機は、この報告書の

前巻を読み、「おもしろそうだ」と感じたからです。起業教育研究会報告書①の8ページにある『“世に役立つ人物を養成する”“社会の問題を実際に解決していく能力・資質を養成する”ことを起業教育と考えようと思う。』というこの言葉を見たときに、鹿本高校で取り組んでいる「生きる力」を育成するための「らせん型カリキュラムでの課題解決型学習」と同じであると感じました。例年の実践報告とは違い、具体的に何か「ものを創った」とかいう発表ではありませんが、本校の「総合的な学習の時間」を通して、少なからず生徒が成長していることには間違いありませんので自信を持って報告させてもらいます。



実践発表

はじめに、本校の卒業生を2人紹介したいと思います。まずは、平成21年度卒業生の日高さんです。2月に文部科学省で行われた「総合的な学習の時間フェスタ2009 ～だから”総合”は やめられない！～」において事例発表を行ってくれた生徒です。彼女は、鹿本高校の「総合的な学習の時間」の活動報告をこのような形で締めくくりました。『私にとって鹿本高校の総合的な学習の時間を一言で言うならば、★進路決定のためのコンパス、そしてなりたい自分をさがす旅だと思います。★自分がどう生きるかと同時に、自分をどう生かすか

ということ、それこそが人として生きる一番の目的なのではないでしょうか。私にとって大学進学は自分を活かす夢への第一歩であり、鹿本高校の総合的な学習の時間が私の背中をポーンと押して、前へ大きな一歩を踏み出させてくれたと思います。10年後、20年後の自分が、どう自分らしく自分を活かしながら生きているか、とても楽しみです。』と。

次に平成13年度卒業生の五十嵐くんです。彼は、熊本県教育委員会主催の「平成20年度総合的な学習の時間コーディネーター養成講座」で講師をされた村川先生（鳴門教育大学）の講演の中で次のように紹介されました。『私の教え子に五十嵐健という学生がいた。現在、鹿本管内で教師をしているが、自分の出身校である鹿本高校の「総合的な学習の時間」での経験を次のように述べてくれた。彼は、高校1年生のときに、「バーチャル市役所」というテーマのもと、10年後の政策を考えることになり、国や県の教育事情を調べる活動を行った。2年生になると、少子化問題について個人研究を行い、その際、教師になりたいという思いを強くしたという。また、3年生では、「未来への架け橋」のテーマで、これまで調べてきたことをホームページにまとめ、活動を通して、自分は教師になりたい、また、「総合的な学習の時間」は重要であるという思いを強くしたと述べた。そして、鳴門教育大学大学院に入学し、村川教授のゼミに入りたいと思ったという。ところで、彼は大学に入り、いろいろ活動していると、鹿本高校出身は周囲と少々違うという話になったそうだ。いつの間にか自分がリーダーシップをとっているし、きついことも無理なく取り組んでいるということからしい。どうしてそうなのかと考えたとき、高校時代の「総合的な学習の時間」の経験が生きているなぁと思ったそうだ。』と。

当然、この2人が持っていた資質や能力はもともと高かったと思います。鹿本高校の「総合的な学習の時間」だけで、このように育ってくれたとは思いません。しかしながら、先日、昨年卒業したある男子生徒の保護者に会う機会があり、このような話をお聞きしました。彼の大学生活においての話です。彼は、「大学での課題やレポート作成等に周りの友人が苦労するのが不思議だ。」と家で話をするそうです。彼は何とかこなしているようで、その保護者の方がおっしゃるには、鹿本高校の「総合的な学習の時間」が生きているのだと思いますとのことでした。

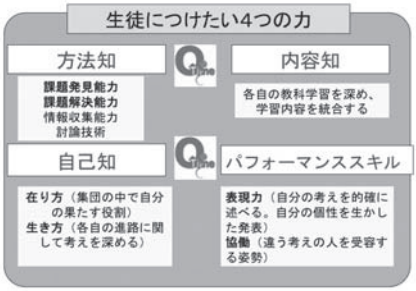
鹿本高校の「総合的な学習の時間」は「Qタイム」と名付けており、このQタイムで生徒に身につけたい4つの力として右図のようなものを設定しています。

こういった力を少なからず身につけることによって、いろんなことにチャレンジする気概を生むのではないかと考えています。「やり方がわかりません。」

「調べ方がわかりません。」などの大学を出たての新入社員が言いそうなセリフですが、本校の卒業生はきっと言わないのではないだろうか。「ちょっと調べてみます。」「失敗するかもしれないけどやってみます。」と言える生徒が育っていることを実感しています。

さて、前置きが長くなりましたが、これから本校の「総合的な学習の時間」＝「Qタイム」の実践報告をします。

学習指導要領の「総合的な学習の時間」のねらいとして、①自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること。②学び方やものの考え方を身につけ、問題の解決や探求活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の在り方生き方を考えることができるようにすること。とあります。これを受けて鹿本高校では、生徒一人ひとりに卒業までにどういった力をつけてもらいたいのかという、ビジョンを持って行わないと意味がないと考え、生徒一人ひとりの自分探しをたすけるために、この学習で生徒にどのような資質・能力をつけるのかということを原点とし、①学び方を学ぶ、もしくは学びに必要なスキルを獲得する「方法知」②教科学習の深まりと総合的な学習との学習内容の統合としての「内容知」③自己理解を深め、高校生としてこれからの自分の生き方に対する考えを深める「自己知」④自分の考えを巧みに表現し、他者と協力して物事を成し遂げる能力やそのために必要な技術である「パフォーマンススキル」と分け、この4つの力を育てるために、5つの単元カリキュラム（P56掲載）を構成しています。この5つの単元は一見、別々のもののように見えますが、アプローチの仕方や、視点（視線）の方向、発表の手法などを変えているだけで同じようなことを繰り返しているだけです。それぞれの単元で、ブレーンストーミング、ＫＪ法、ウェビングなどを用い、①現状分析を行い、課題を発見する。②その次に、課題の解決策を考察する。③最後に、解決策を提示する。この3つの流れを各単元ごとに、少しずつレベルを上げて行っているだけです。



少し具体的に説明しますと、第1単元の「Apple Program」 では、まず問題の解決や探求活動に主体的、創造的に取り組む態度を育てるために、自分の好きな方向に勝手に発展して構わないようになっています。

それぞれのクラスにおいてテーマを決め、まずは大きめの付箋に生徒個人が

連想することや疑問に思うことを書いて黒板に貼らせます。（たとえばテーマが「リンゴ」であったなら「赤と青があるのはなぜ」「蜜がある」「白雪姫」など）次に、生徒に依頼し、黒板にある付箋をＫＪ法を用いてグループ分けしてもらいます。適当な4〜6人程度の小テーマのある班が完成します。今度はその班内で小テーマに関して、ブレーンストーミングを用いて、どんどん意見を出させます。この時に、ブレーンストーミングの4つのルール（①批判厳禁、②自由奔放、③量を求む、④便乗発展大歓迎）を学ぶことで、他人任せにしない、とりあえず自分の考えを持つ生徒が増えている感じがしていますし、また、当たり前と思っていることについても疑問を持てるようになって欲しいと教えます。さらに、他人任せにしないという意味では、班活動においての班長の役割を明確にします。班長には絶対の権限があり、発表者や記録など班長が好きなように、みんなのことを考えて指示していいようにさせています。さらにその後ＫＪ法で分類し、それぞれの調べる役割分担をし、発表へとつながっていきます。半年間の活動を行っていく中で、班内発表会やクラス内発表会を行い、互いに刺激しあえるように考慮しています。また、発表についてもまずはモノシートをつくらせるなど、イメージ創りやまとめ方の手法を学んでいきます。発表形態は、文化祭においての展示発表を行っています。

第2単元の「バーチャル市役所プラン」では、明確なゴールを設定した課題解決学習。リアリティーのある学習をとおして、生き方（進路）を考えさせます。ブレーンストーミングや今回はウェビングを用いて課題を広げたり、深くする流れは「Apple Program」と同じなのですが、大きく違うことが2つあります。1つめは、それぞれの生徒を進路希望に沿った課に配属するというクラス解体をして行うことです。１年生のこの時期に他のクラスの生徒と一緒に学習するというのは、期待も大きいが不安もあります。しかし、クラスを解体することで、１学年全体の横のつながりができるだけでなく、初めて出会う人たちとも、積極的に協力しあうことのできる人間を育てるという効果もねらっています。同時に我々教師にとっても、より多くの生徒の潜在能力を見抜き、伸ばすことができるチャンスであるとプラス思考で考えるようにしております。現に生徒達の中には、他のクラスの生徒たちと学習することで、刺激を受け、向上心が高まると感じている生徒もいるようですし、教師も普段は授業に行かないクラスからやってくる生徒たちに刺激をうけ、授業を工夫していかれます。2つめは、例えば健康福祉課へのミッションの「市民にとって理想的な病院をつくる計画をプレゼンせよ。」のように、これまで生徒は何事も「受ける」立場であったのが、この単元では、「与える」立場に立たなければならないということです。こ

鹿本高校「総合的な学習の時間」カリキュラム

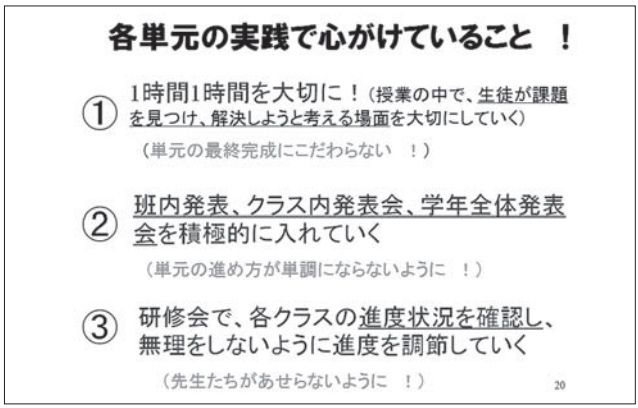
学年	学期	単元名	ねらい
1年	前期	Apple Program	鉛筆やノートなど、生徒たちにとって身近なものを対象として取り上げ、課題発見・課題設定・課題解決の方法や情報収集・情報整理の方法、発表・表現技法の基礎を学ぶことを目的に行う。
	後期	成功へのエチュード ～バーチャル市役所プラン～	生徒たちを近未来の仮想都市の市役所職員に見立て、生徒を進路希望ごとに各課に配置し、現代的な課題について「市長からのミッション」を解決するという形態で取り組む。課題発見・課題設定・課題解決能力の深化や情報収集・情報整理能力の発展、発表・表現の技法を学ぶことを目的に行う。
2年	前期	知の方法論 ～ディベート～	ディベートを通して論理的思考力の育成、意志決定能力、問題発見・解決能力の育成、情報活用の実践力の育成、発表・表現の技法を習得することである。また、本単元の学習を通して生徒たちに協働の精神を涵養する。
	後期	Young Doctor Plan	課題解決能力育成を目的とし、「小さな博士」を目指して個人レベルで課題研究に取り組み、論文形式で研究結果をまとめるという形態で取り組む。また、各自の進路希望と密接な課題を設定することにより、本単元の学習を通して、生徒各自のこれからの生き方を具体的に考える契機とすることをねらう。
3年	全期	未来への架け橋	生徒一人ひとりが将来の夢について考え、過去を振り返り、整理する。また、自分が進みたい学問分野について調査し、その学問分野の紹介や課題についてまとめ、大学をはじめとする上級学校及び社会との接続を目指す。

の立場の逆転を理解させ、日頃考えたこともないような視点で考える習慣を身につけさせることが、生徒達をより主体的に動かしていくカギではないかと考えます。この単元においても、班内発表会やクラス内発表会を繰り返し、最後には体育館において学年発表会を行い、ほとんどの生徒がプレゼン資料を作成し、ステージに立って発表するという経験をさせています。

次に第3単元「ディベート」は、コミュニケーション能力を向上させる課題解決型の学習です。「聞く力」（相手の考えを正確に理解する力）と「話す力」（自分の考えを正確に伝える力）を育成します。論題の持つメリットとデメリットをブレーンストーミングやＫＪ法を用いて洗い出し、その理由をまとめ、反駁を考えることで、論理的思考力や意志決定能力も育成したいと考え行っています。単元の流れを簡単に紹介すると、①「ディベートとは何か」各自で調査すること（情報活用能力）②調べたことを班で発表する（生徒の協働を育成）③ミニディベート体験（生徒の協働を育成）④本格的なディベート体験（審査方法についても学び、他のディベートを評価させ、クラスメイトのすばらしさに気づかせると同時に責任感と協働の精神を涵養する。）すなわち、この単元

で生徒たちは論を闘わせることのおもしろさを実感し、論題に関する情報を収集する能力、根拠をつけて論の展開を考え、そして相手の論に対して根拠をつけて反駁する客観的思考、さらに自分たちの論を相手やジャッジに対して発信するパフォーマンススキルを身につけてくれたらと考えて実践しています。また、自分の役割に対する責任感、他のチームメイトと協働する力を少なからず身につけてくれます。

第4単元の「Young Doctor Plan」 では、個人レベルで課題研究に取り組み、論文形式で研究成果をまとめます。この単元においても、第2単元の「バーチャル市役所プラン」と同じように、個人が希望するテーマクラスに分かれて授業を展開していきます。次のページに生徒の論文があります。彼女の場合は「心と脳の不思議」というテーマクラスに所属していました。「心と脳に音楽がもたらす効果」という論題で最終的に論文をまとめたのですが、こういった論文を書くときも最初は一緒です。同じような分野に関心がある生徒の班をＫＪ法でつくり、ブレーンストーミングやＫＪ法、ウェビングなどの手法を用いて少しずつテーマを掘り下げていきます。例えば個人テーマのウェビングを行う際、自分だけではなかなか知識が乏しく、膨らんだり、掘り下がらないので、個人でまずウェビングをして、その外側を班員にウェビングしてもらいます。2分毎くらいに回して、どんどん書けというような形で友達からヒントをもらったりもしています。中間発表会などを取り入れる理由も同じですが、友人（同級生）の教育力にはいつでも感心させられます。「あいつがあれだけ頑張っている」と知ることで、自然と生徒のモチベーションが上がります。生徒の力を信じ、待つ勇気を持つことも、育てるために大事なことであると感じています。この単元でも、最後は個人個人でテーマクラス毎に発表会を行い、生徒同



士で評価をし、代表者を決定し、全体発表会を行っています。

最後に第5単元の「未来への架け橋」です。この単元では、将来の夢（職業）について考え、自分の進みたい学問分野（職業）の課題と夢を実現するための自分の課題についてまとめ、解決に繋げていきます。今の高校生というのは自分に甘いのか、どうにかなると思っているのか、なかなか自分のことに一生懸命になれない生徒が増えてきているような気がしています。しかしながら、結構他人のことには一生懸命になれるんですよね。（他人と違うことをしていじめられたくないのか、人と人との付き合いが希薄になったせいか、携帯電話普及の影響かわかりませんが・・）そこで、友達の就きたい職業を考えてやろうという形で行っています。クラスメイトの職業調査を4人分、ランダムに誰のか分からないようにして依頼します。他人の職業、自分が考えたこともない職業を調べることによって、調べ方も学べますし、自分の職業を調べるときの練習もしているのです。自分が4人の職業を調べてあげるということは、4人が自分の就きたい職業について調べてくれます。当然リサーチシートが４枚返ってきます。この4枚のリサーチシートを参考に、自分の職業シートを作成していきます。自分の就きたい職業というのは、良い面ばかりしか見えてないかもしれないというねらいもあります。他人に調べてもらうことによって、自分では見えなかった職業観や実現するための様々な方法に気づくことができ、職業観も広がっていくのです。そして、自分の生き方をもう1回考え直すという取り組みにしています。

最後に、生徒のアンケート結果と感想、本校のＱタイムのイメージ図を掲載し、実践報告を終わります。（次ページに掲載）

心と脳の不思議

心と脳に音楽がもたらす効果

2年 N.O

1. 論題

「心と脳に音楽がもたらす効果」

2. アブストラクト

私は音楽療法に興味がある。音楽療法とは、「音楽の持つ生理的、心理的、社会的働きを用いて、心身の障害の回復、機能の維持改善、生活の質の向上、行動の変容などに向けて、音楽を意図的、計画的に使用すること」である。音楽で心や脳に働きかけることにより、薬や痛みを伴わずに心身の病気の治療ができたら、それはとても素晴らしいことだ。現在日本の医療現場で音楽療法が用いられている例は少ないが、将来音楽療法が大きな力を発揮することを期待している。私はその現場で人の役に立てる仕事をしたい。音楽療法で音楽が心や脳にもたらす効果について考える。

3. 音楽療法の現状

音楽療法は古代より行われ、ギリシャ時代の哲学者たちは、疾病は、肉体と魂との間、知性と情動との間の調和の喪失であると考えていた。そして、その調和を取り戻す手段として、音楽の鑑賞が有効な方法であると考えていた。現在の音楽療法は、聴取した音楽が心に変化を生じさせることを目的とした「受動的音楽療法」と、歌唱や演奏の体験を通して心身活動性が促進されることを目的とした「能動的音楽療法」に分けることができる。また、疾病や障害の種類によりテンポやリズムなどの音楽の構成要素を利用した「機能的音楽療法」や、心理療法の手段として音楽を用いる「心理療法的音楽療法」という概念もある。治療はセッションと呼ばれ、ひとりの患者さんにアプローチを施し治療効果を導く「個別音楽療法」と、他者との共通体験や他者による影響を考慮した「集団音楽療法」とがある。

現在の日本では、音楽療法士が国家資格の医療職ではなく、日本における音楽療法は、福祉、教育、保健の場で行われることが圧倒的に多い。

4. 音楽療法の音楽のはたらき・効果とは

- ●同質の原理・・・聴き手の気分やテンポに合った音楽を与えることで、精神的に良い方向へ向かわせる音楽療法の原理。
- ●1/fのゆらぎ・・・規則性のない、かといって全くのランダムでもない奇妙な周期性をもつゆらぎの現象。生命力が最もいきいきしてくるリズムであり、心身が共にリラックスしている時の心拍は1/fのゆらぎを示す。

効果

①ストレスや不安の除去
②心身活動性の改善
③記憶想起
④様々な病気の治療で患者さんとのコミュニケーション機能を高める
⑤病気の有無に関わらず、生活の質の向上

以上5つの効果が考えられる。老人ホームで、それまで無口だったお年寄りが、自分の知っている曲を聴いているうちに緊張がほぐれおしゃべりするようになったなどの例がある。

5. 課題

音楽療法には多くの効果があるが、患者さんひとりひとりによって音楽の趣向も違うし感じ方も違う。一方的にこの音楽が良いからと決めるわけにはいかない。音楽療法を行っていくためには多くの臨床経験をつみ、患者さんと向き合っていく事が大切だ。また、現在の医療現場では音楽療法が体系化されておらず、あまり普及していない。音楽療法が多くの場で行われるようになるには今後どのようなことが必要なのだろうか。

6. 解決策

音楽療法には患者さんの数だけ方法がある。音楽療法士の方のホームページより引用すると「患者さんが懐メロを聴きたいと言えばテープやCDを使う事もあるし、障害を持つ子どもに即興的に音楽を作る事もある」そうだ。音楽療法士となって多くの臨床経験をつみ、患者さん一人一人の痛みに寄り添っていくことでより効果を生むだろう。

また、日本の医療に音楽療法を位置づけるためには、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士といったほかの医療職との整合性の問題を解決する事が必要だ。現在音楽療法が行われている病院や施設から、音楽が心や脳に与える効果を外に広めていくことで少しずつでも普及していくはずだ。

7. 結論

音楽が心や脳に大きな効果を与えることがよくわかった。音楽と、人の心や脳との関係を大昔から知っていた人がいたなんてすごい！と感動した。だが、効果がわかっているのに、日本ではあまり普及していない事は残念なことだ。音楽療法を確立するためにはまだまだ長い道のりがあるだろう。これからの音楽療法の活躍を期待している。将来音楽療法の分野に携わり、どこかで音楽療法を使って、人々の生活を豊かにしていきたい。

生徒のアンケート結果より

⑧友だちの将来の夢や進路について知ることは自分のためにもなると思う。

⑩「未来への架け橋」で、自分の将来の夢や進路について考えることで学習意欲が高まった。

⑪「未来への架け橋」の学習で将来就きたい職業が明確になった。

「あてはまる」「やあてはまる」が80%を占める



生徒の感想より

- 「介護福祉士」を目指すYさん

今まで漠然と「介護福祉士になりたい」という思いしかなかったのが、自分の職業についての仕事内容や理想の人物像、仕事に就くまでのルートを調べることで、自分の将来像が明確になり、夢の実現のためには何をしなければならないのかなどを考えることができました。また、個人の作ったHPをみんなに見てもらい、志望動機などを発表することで、改めて自分の夢に自信を持つことができました。そして、自分も友だちの夢を聞くことで視野が広がり、いろいろな分野から「福祉」という大きな課題に関っていければいいなあと思いました。

<自分の夢に自信を深めていく生徒> 101

- 「管理栄養士」を目指すTさん

高校に入学した時、私の夢は「メイクアップアーティスト」になることでした。女の子はきれいになりたいとみんな思っているし、私自身もきれいになりたい、また相手をきれいにしたいと考えていたからです。でも、このQtimeの5つの単元を経るにつれて、本当の美しさは外見からではなく、内面から磨かねばならないということに気づかされました。今の私の夢は管理栄養士になることに変わりました。人々をより健康的に、内面から美しくするお手伝いができる人になりたいと決意を新たにしています。

<自分の進路を見直し、さらに進化していく生徒> 102

